

花吹雪

著者	富永, 雄載
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 8
ページ	1 7 5 - 1 7 6
発行年	1915-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6511

霸王樹のかげに

二、二、乙

徳

富

敦

霸王樹^{サボテン}のかげにひろがるみんなみの白鳥光る海のごと生く。
時折に胸にあふるゝ若き日のよろこび故にうた覺わける。
世のつねの悲しみごとの程ならば涙を見せんわれならなくに。
六月の光は満てる天地のその一片の日のさゝぬ國。
今日よりは道べのくらき圓石も眞球のごとくかゝやきて見ゆ。
孤獨の身きたなき足袋をうらがへし匂ひを吸ぬかなしからずや。
疲れたる腫は物をよく見せぬ珈琲罐の赤きレッテル。

花 吹 雪

三部二年

富

永

雄

載

胸に乗りて行けば十里の花吹雪のごかなるかな大和路の春。
やはらきの光を載せて艷人の「春」はきませり櫻咲く國。
汽車の音は遠くきこれて繪日傘の見わかくれする菜の花の路。
一管の筆たづさへて草枕身を行く雲にまかせてしかな。

國亡び黄なる花咲く高原を驢にして行けば月さしのぼる。
歡樂の酒にひたりて歌ふ夜の更くればかなし孤兒のごと。
孔孟の教は讀めぞ大いなるわが哀しみのやりどころなし。

一念の椿

地 橙 孫

少年の朝の挨拶木蓮に帽ふるゝ。
額の上押しつけし木蓮の息吹より。
牛濡れし毛並にうつる花となり。

朝々子心に咲き念じたる椿かな。
うなじ、椿をちぬ人身を忘れん。

酒瓶に人の手をつげざる春の風。

ひばり地をはなれて仰ぐべき我はなかりけり。
なにとなくむしるげんげに光かな。
ありあまるげんげを己がまゝにつめ。

心の沼の芦の芽のみな日に向けり。
わが向日葵 朝よりの花におろがみぬ。